医療系大学における 新入生の大学適応感に及ぼす大学生活要因の影響

榎本光邦

(群馬パース大学保健科学部)

キーワード: 大学適応感, 大学生活要因

Influence of the college life factors exerted on new student's college adaptation feelings in the medical treatment system college

Mitsukuni ENOMOTO

(Gunma PAZ College)

Key Words: college adaptation feelings, college life factors

【 目 的 】

現在, わが国では大学入学者の8~10%程度が中退している。2012年に文部科学省が大学中退に関する初めての全国調査を行い, 中退防止策を検討する方針を発表するなど, 大学中退問題への対応は大学教育における喫緊の課題の一つであると考えられる。大久保(2005)は, 大学中退に影響を及ぼす要因の一つとして学生の「学校適応感(所属大学という環境において, 何となく上手くやっていけそうだという感覚)」を挙げており, 大学1年次において学校適応感を形成することが, 大学4年次に適応感を持つことができていることと関係があることを明らかにしている。本研究では, 大学新入生を対象とし, 学校適応感とその形成に影響を及ぼすと考えられる学生が大学生活で経験することの関係を明らかにすることで, 新入生の学校適応感の増進を促す支援方法を構築する一助とし, 中退の危機が生じることを未然に防止することにつながることを目的とする。

【 方 法 】

対象者 関東圏内の医療系私立大学の新入生 219 名 (男子 64 名, 女子 155 名)

質問紙の構成 質問紙は (a) 青年用学校適応感尺度 30 項目 (大久保, 2005), (b) 大学生用学校生活尺度 24 項目 (大久保他, 2010) を用いた。

手続き 新入生が大学入学後から2か月程度経過した時点で, 講義終了後の休み時間に質問紙を一斉配布し, 回答を求めた。なお, 本研究は著者が所属する大学の研究倫理委員会の承認を得て行った。

分析方法 (a) および (b) に対して, 因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行い, (a) について抽出された各因子を従属変数, (b) について抽出された各因子を独立変数とし, それぞれ重回帰分析(ステップワイズ法)を行う。

【 結 果 】

因子構造 (a) の 30 項目について, 最尤法による因子分析(プロマックス回転)を行った。固有値と累積%から5因子解を採用し, 同様の因子分析を行った。全ての因子に関する因子負荷量が.40未満であった3項目を除外し, 同様の因子分析を行い, 第一因子は「居心地の良さの感覚」, 第二因子は「周囲に信頼され, 必要とされている感覚」, 第三因子は「周囲に受け入れられている感覚」, 第四因子は「課題や目的の存在」, 第五因子は「劣等感の低さ」と命名した。

(b) の 24 項目について, 最尤法による因子分析(プロマックス回転)を行った。固有値と累積%から4因子解を採用し, 同様の因子分析を行った。全ての因子に関する因子負荷量が.40未満であった1項目を除外し, 同様の因子分析を行い, 第一因子は「友人との関係」, 第二因子は「教員との関

係」, 第三因子は「クラブ・サークル活動への参加」, 第四因子は「学業への取り組み」と命名した。

(a) の各因子の得点を従属変数, (b) の各因子の得点を独立変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。「居心地の良さの感覚」に対しては「友人との関係 ($\beta = .628, p < .001$)」「教員との関係 ($\beta = .231, p < .001$)」が, 「周囲に信頼され, 必要とされている感覚」に対しては「友人との関係 ($\beta = .515, p < .001$)」「教員との関係 ($\beta = .176, p < .01$)」「学業への取り組み ($\beta = .119, p < .05$)」, 「周囲に受け入れられている感覚」に対しては「友人との関係 ($\beta = .773, p < .001$)」「教員との関係 ($\beta = .097, p < .05$)」が, 「課題や目的の存在」に対しては「学業への取り組み ($\beta = .301, p < .001$)」「友人との関係 ($\beta = .215, p < .01$)」「教員との関係 ($\beta = .223, p < .01$)」が, 「劣等感の低さ」に対しては「友人との関係 ($\beta = -.331, p < .001$)」「学業への取り組み ($\beta = -.163, p < .05$)」が独立変数として投入された。

【 考 察 】

大学新入生にとって, 「友人との関係」が学校適応感のどのような側面に対しても, 影響を及ぼす要因であると考えられる。「居心地の良さの感覚」「周囲に信頼され, 必要とされている感覚」「周囲に受け入れられている感覚」という学校適応感に対しては, 「友人との関係」以外には「教員との関係」も影響を及ぼしており, 大学内での対人関係が, これらの適応感の形成に寄与すると考えられる。また, この中で, 「周囲に信頼され, 必要とされている感覚」については「学業への取り組み」も影響を及ぼしていたが, これはグループワークなどを行う授業を通して, 同級生や教員との間で, 被信頼感や必要とされている感覚を形成しているのだと考えられる。「課題や目的の存在」「劣等感の低さ」に対しては, 「友人との関係」の他に「学業への取り組み」が影響を及ぼしており, 大学という新たな環境において, 高校までとは異なる授業形態に適応し, 自主的に勉学に取り組むことが課題や目的を自覚することにつながり, また, 自分だけが勉強面で周囲から取り残されているという感覚を持たないことに寄与すると考えられる。

【 引用・参考文献 】

文部科学省 2014 学生の中退退学や休学等の状況について 報道発表。

大久保智生 2005 生年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319。

大久保智生, 川田学, 江村早紀, 折田祐希 2010 大学新入生の自律的進学同期が大学生活への適応に及ぼす影響 香川大学研究紀要, 7, 71-87。